【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	熊本県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	牛深市立牛深中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	３	３	１	１０	２５
生徒数	８７	９２	９６	１	２７６	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「一人一人が確かな学力を身につける授業の創造」
～基礎・基本の確実な定着に向けた徹底指導と能動型学習～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・全学年・全教科
学校全体で，研究に取り組むため
（少人数授業については、数学・英語で全学年実施）

(2)　年次ごとの計画

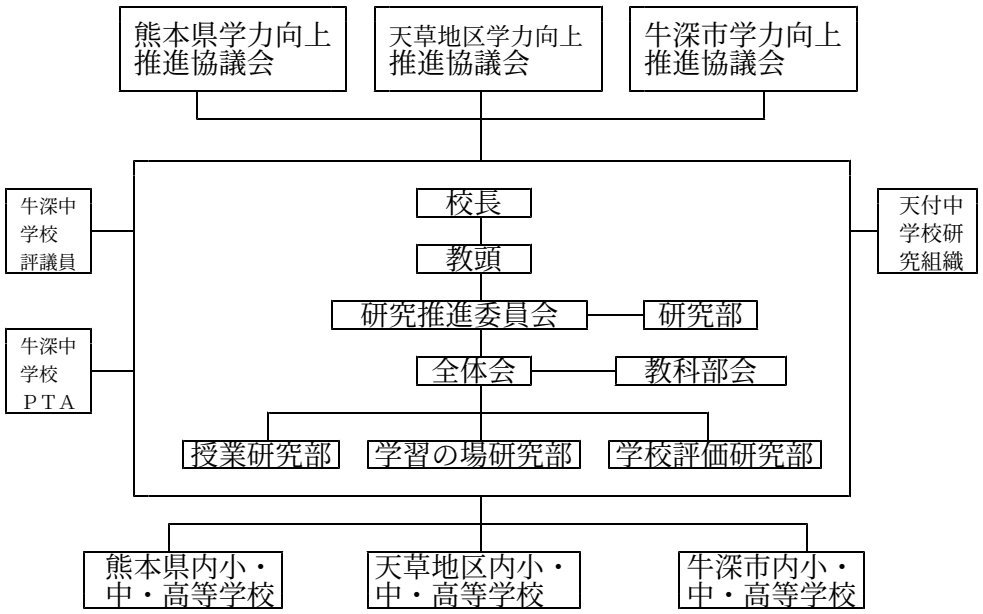
平成14年度	○　テーマ 「確かな学力を身につける授業の創造」 ～基礎・基本の徹底と能動型学習の展開～ ○　研究の見通し（仮説） ア　基礎・基本の定着と能動型学習の展開がめりはりを持って行われ，有機的に結びついた授業を行えば，確かな学力を身につけさせることができるのではないか。 イ　少人数指導や習熟度別指導を取り入れた補充・発展的な学習など，個に応じた授業を行えば，確かな学力を身につけさせることができるのではないか。 ウ　生徒・教師ともに評価し，次の学習・指導へと生かしていく学習サイクルを確立すれば，確かな学力を身につけさせることができるのではないか。 エ　選択教科の拡充，総合的な学習の時間の充実により，知の総合化がはかられる教育課程を編成すれば，確かな学力を身につけさせることができるのではないか。 オ　地域，家庭との連携を図り，本校ならではの特色ある教育課程を編成すれば，確かな学力を身につけさせることができるのではないか。 ○　研究の内容・方法 ＜授業研究部＞ ア　基礎・基本の定着と能動型授業を関連して位置づけた指導計画の作成 イ　基礎・基本を定着させる指導方法と能動型授業の研究 ウ　ＴＴや選択教科での授業研究 エ　研究授業の計画，実施，公開 ＜評価研究部＞ ア　評価計画の作成と検証。修正 イ　授業における評価方法と評価を指導に生かす方法の研究 ウ　自己評価と相互評価の研究 エ　教師・教科間，他校との実践情報交換 ＜教育課程研究部＞ ア　３年間を見通した身につけさせる力の設定 イ　選択・総合的な学習の時間の位置づけの明確化

	ウ　本校の特性を生かした教育課程の編成 エ　地域・家庭との連携

平成15年度	○　テーマ 「一人一人が確かな学力を身につける授業の創造」 ～基礎・基本の確実な定着に向けた徹底指導と能動型学習～ ○　研究の見通し（仮説） ア　きめ細かな指導により、基礎・基本の確実な定着に向けた徹底指導と能動型学習のめりはりのある授業を行えば、生徒一人一人が確かな学力を身につけることができるのではないか。 イ　発展的な学習で、生徒の個性等に応じて力をより伸ばす授業を行えば、生徒一人一人が確かな学力を身につけることができるのではないか。 ウ　学ぶことの楽しさを体験させ、学習意欲を高める学習の場を設定すれば、生徒一人一人が確かな学力を身につけることができるのではないか。 エ　学びの機会を充実し、学ぶ習慣を身に付けるために学校・家庭・地域が協力してそれぞれの役割を果たせば、生徒一人一人が確かな学力を身につけることができるのではないか。 オ　確かな学力の向上を目指す特色ある学校づくりを推進するための学校評価システムを構築すれば、生徒一人一人が確かな学力を身につけることができるのではないか。 ○　研究の内容・方法 ＜授業研究部＞ ア　徹底指導と能動型学習のめりはりのある授業をどの教科でも、どの単元でも、誰でもできるよう明確にし、年間計画の中に位置付ける。 イ　少人数授業や発展的・補充的学習（習熟度別指導）の単元構成、指導方法や教材開発について研究、実践を行い提案する。 ウ　客観性・信頼性の高い評価を行い、生徒の学習の状況をきめ細かくとらえるとともに、それを次の指導にいかす方法を研究する。また、学習活動の中で自己評価や相互評価を取り入れるために、その場面や方法などの研究を行い、実践、提案する。 ＜学習の場研究部＞ ア　学校における諸活動の中で、地域の人々を効率よく活用する場を考え、取り入れる。 イ　学校・家庭・地域での学習の内容を充実・習慣化させるために学年全体や保護者のコメントなど様々な視点を取り入れる。 ＜学校評価研究部＞ ア　「確かな学力」を持った目指す生徒像の確立 イ　校内・校外評価項目の精選・改善 ウ　評価を生かすための教育課程の工夫・改善 ＊　今年度は、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導のいっそうの充実を図るための実践研究を行っていく。そのためには、発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発や個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善、生徒の学力の評価を生かした指導の改善を図る必要がある。その上で、基礎・基本を確実に定着させるために、徹底指導と能動型学習のめりはりのある授業を行い、生徒一人一人が確かな学力を身に付ける授業を目指すこととした。

平成16年度	○　テーマ　　平成１５年度に同じ ○　研究の見通し　　平成１５年度に同じ ○　研究の内容・方法 ア　徹底指導と能動型学習のめりはりのある授業、少人数授業、発展・補充的な学習、指導と評価の一体化の視点から授業改善を行い、研究の妥当性を検証する。 イ　研究内容を保護者・地域と共有し、一体となって生徒の学力向上に取り組む体制を確立する。 ウ　家庭学習や朝自習、学習態度の指導を継続するとともに、形骸化しないようその改善をはかる。 エ　学校の内部・外部評価を次の改善へとつなげる学校運営システムを確立し、広く情報を公開する。

(3)　研究推進体制



＊ 学校評議員，本校ＰＴＡ，来年度統合となる牛深市立天附中学校との連携を図った。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１　研究の成果

＜標準学力検査（４月実施）の結果推移＞

学年	全学年			１年	２年		３年		
年度	13	14	15	15	14	15	13	14	15
学力	51.2	50.3	51.4	51.8	50.1	50.9	52.8	50.9	51.6
成就値	0.0	-0.1	1.4	2.6	-0.6	0.1	1.5	-0.3	1.5

○　標準学力検査の全国偏差推移をみると、学校全体、各学年とも向上しているといえる。また、知能偏差に対する成就値も向上している。

○　徹底指導と能動型学習のめりはりをつけて授業に取り組むことにより、徹底指導で身につけた基礎・基本を能動型学習で活用し、単元の学習を効果的に行うことができた。特に能動型学習においては、表現力の向上を図ることができた。

○　少人数授業を行ったことで、一人一人の発表場面が増え、学ぶことへのやる気・意欲を高めることができた。

○　多様な選択教科を開設したことで、生徒の興味・関心や能力等に応じた学習課題、方法、内容を設定し、生徒自らによる主体的な学習を実現することができた。特に、選択Ａ・Ｂ（発展的な学習）においては、若潮祭（文化学習発表会）で、多くの発表が見られ、表現力の向上が見られた。

○　年間指導評価計画をもとに、毎時間の評価を計画的に行うことができた。

○　ゆうチャレンジ、標準学力検査、定期テスト、学期末の評定などの結果を分析し、生徒の学力の実態や課題を把握し、次の指導の改善に生かすことができた。

○　授業中の学習態度を改善するため、「学習の規則」を設定し、全職員で共通して指導することにより、集中して授業に取り組むようになった。

○　家庭学習の習慣化を目的に、全クラスで「自学ノート」に取り組んだ。各教科の学習モデルを示し、生徒の優れたノートを紹介することにより、内容の深まりが見られるようになった。

○　自学自習ができる生徒の育成を目指し、朝自習の学習内容を系統的に整理し、計画的に取り組むことにより、自分の課題に対して静かに取り組む雰囲気ができた。

○　「確かな学力」を身につけた生徒像を定義し、その実態を把握するためのアンケートを作成し実施することにより、今後の指導のポイントを明確にすることができた。
○　職員・生徒・学校評議員等による「学校評価」を実施することにより、多様な立場から学校評価を行い、学校の情報を保護者や地域に積極的に公開することができた。

２．今後の課題

○　発展・補充的な学習や習熟度別指導を有効に実施するために、単元構成を再考し、年間計画の中に系統的に位置づけていく必要がある。また、教材開発を行うとともに、その評価については評価規準・基準の設定方法や、成績への取り入れ方などが課題である。
○　少人数授業への取り組みでは、ガイダンスやレディネステスト等の実施までに時間を要し、実践が少なくなった。来年度に向けて教科での研究を深め、授業実践を増やしていく。
○　自己評価と相互評価のねらいや有効性を明らかにし、より効果的な使用法、場面等を研究し実践を行う。
○　「学習の規則」については、月末に生徒による自己評価を行い、教師が生徒の実態を把握するとともに、生徒自身が自分の学習態度を改善していくよう活用する。
○　「自学ノート」を中心に家庭学習の充実を図るためにも、保護者の理解、協力が不可欠であり、今後どのように連携を深めていくかが課題である。
○　「確かな学力」を身につけた生徒像に関するアンケートを継続的に実施し、その結果をデータベースとして活用し、さらに詳細な分析をはかり、今後の研究に生かす。
○　今年度は、多様な評価の対象、方法を採用し実施した。これらの評価から、本校の実態をとらえるために最も効果的な評価に改善する。
○　学校の教育情報を可能な限り公開し、保護者、地域の理解や協力のもと、特色ある開かれた学校を創造していく。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

○ 標準学力検査
・前年度の生徒の学習状況を検査し，生徒一人一人や新しい学級・学年・学校全体の学習状況を把握し，今後の指導の課題を明らかにする。
・国，社，数，理，英（１年生は国，社，算，理）のペーパーテスト
・４月
○ ゆうチャレンジ（熊本県教育委員会作成問題）
・生徒の学習状況を観点別に検査し，生徒一人一人や学級・学年・学校全体のこれまでの学習の成果を把握し，今後の指導の課題を明らかにする。
・国，社，数，理，英のペーパーテスト
・２月
○ 確かな学力を身に付けた生徒像アンケート（本校独自）
・「確かな学力を身に付けた生徒像」をもとにアンケート調査を行い，本校が目指す生徒像に対して生徒の実態を把握するとともに，今後の指導の課題を明らかにする。
・本校が目指す「確かな学力を身に付けた生徒像」について，４段階でアンケート調査を行う。
・学期末
○ 学習態度アンケート（本校独自）
・日頃の授業態度を「学習の規則」をもとに生徒が自己評価することで，生徒の主体的な学習態度の改善を図るとともに，今後の指導の課題を明らかにする。
・本校で設定した「学習の規則」について，生徒が自己評価を行う。
・学期末

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

＊　平成１５年１１月１８日（火），本校にて中間発表会を開催した。公開授業（少人数授業，習熟度別指導，発展的な学習，指導と評価の一体化など），授業研究会，全体提案，講演という内容であり，市内の小・中・高の教職員を中心に約２００人の参加を得た。来年度は平成１６年１０月に最終発表会を開催する予定である。
＊　今年度１１月にホームページを開設した。（http://www.higo.ed.jp/jhs/ushibujh）また，中間発表会にあわせて，研究紀要，指導評価計画（CD-ROM）を作成し，配布した。
＊　フロンティアティーチャーとしては，本校の研究内容を研究論文にまとめ出展した。
＊　研究の内容，指導評価計画は，他校でも活用されている。また，他県からの研修視察にも対応している。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　☑１０～１２学級
□１３～１５学級　□１６学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
☑その他

【研究教科】　☑国語　☑社会　☑数学　☑理科
☑外国語　☑音楽　☑美術　☑技術・家庭
☑保健体育　☑その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑　有　□　無